漆黒の死神

碧猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
漆黒の死神

【Ｎコード】
Ｎ１５３２Ｉ

【作者名】
碧猫

【あらすじ】
レヴァースという小さな都が昔あった
そこにはある種族がいた
『龍騎士族』
龍騎士族とは龍と人間が血の契約を交えてお互いの能力の半分を分け与える

契約により龍と人間は一生のパートナーとなる

あらすじ（前書き）

今日始めてやります
よろしくお願いします

あらすじ

レヴァースという小さな都が昔あった
そこにはある種族がいた

『龍騎士族』

龍騎士族とは龍と人間が血の契約を交え
てお互いの能力の半分を分け与える
契約により龍と人間は一生のパートナーとなる

第1章

暗い世界

何もみえない

何か聞こえる

誰だ？

「・・・ねぇ！・・・き・・て！」

聞き覚えのある声だが・・

「敬介〈けいすけ〉

起きてよ！始業式おわっちゃったよ」

「・・・・」

「・・・・」

ムギュ！

「だあ〜！！いでー！」

「・・・・」

「無言でつねるな！！」

無言で俺をつねってきたのは白井　雪菜

〈しらい　ゆきな〉

白い髪をした。身長が低い幼なじみである。

「私は高校の教室でねてる敬介を起こそうとしただけだよ？」

「だからってつねる事ねぇだろ」

少し涙目の敬介がそこにはいた。

「このマメユキ！」

マメを言った瞬間に何かが顔に飛んできた

バスケットボールだ

「なにしやが「マメゆうなぁ！」

今度は拳が飛んできた

「いてえだろうが！」

「龍騎士族だから大丈夫だよ」

「そういう事じゃねぇよ」

「まぁいいでしょ」

「あのな～」

「一緒にかえろ！」

こんな感じで雪菜と帰りに行く事にした俺だった。

第1章（後書き）

ちなみに2人共龍騎士族です

第二章（前書き）

読みずらかったらすみません

第二章

午後　2時　13分
「また今日の夜ねぇ」
俺は雪菜と別れて家に向かった。

「ただいまぁ」
「早かったわねぇ敬介」
「ただいま母さん」

今日は始業式とかだけで終わったからな。

「まあね」

「もう高校1年生なんだからしっかりしなさいよ？」

「ん？」

何のことだ？

「勉強とかでしょ」

「あと遅刻だな」

「うるさい！歩〈あゆみ〉壮介〈そうすけ〉！」

口をだしてきたのは中学1年生の妹と中学2年生の弟である。

妹は笹木　歩
弟は笹木　壮介

そして俺は、高校1年生の笹木　敬介　こんな感じだ。

「「事実を言っただけ」」

「綺麗にハモるなァー！」

「「うるさい」」」

弟と妹に怒られた・・・。

しばらく話しをして俺は部屋に戻り龍騎士族の仕組みについて考えていた

『凶気』という魔力みたいのが存在する。

血に凶気が流れてる者のみ契約ができる。

契約前の龍騎士族は様々な能力があり色々効果がある。

自分の能力の場合だが

ある一人の龍騎士族能力がスピードだとしたら速い攻撃や速く走ることができる。

一体のドラゴンは再生が能力の場合はそのまま

契約すると血の契約だから能力を少し失う事になる。
そこにドラゴンの血を入れて龍騎士はスピードが少し遅くなるが再生を半分手に入れる。
ドラゴンは再生するスピードが遅くなるが龍騎士の能力『高速』が入り高速飛行が可能になったりする
ちなみに武器は凶気で創ることができる
。
能力を発揮するごとに凶気は減ったりはする。
集中して凶気を一時的に高めることも可能だ。

龍騎士族の仕事は敵対する一族『龍人族』を倒すことである。
なんかわからないけど、こっちの世界におくられくる。
おくられて来たのを雪菜とペア組んで倒して封印するのも仕事だ。
考えてるうちに晩飯の時間になっていた
午後　６時　３５分
飯を食べにリビングに向かった。

第3章（前書き）

――〉〈――

これは場面または視点が変わる時に使います。

第3章

午後　6時　35分

リビング

俺はリビングでご飯を食べていた。

「ちょっと出掛けてくるけど、歩はなんか借りてきてほしいやつあるか？」

「うーんいーや、お兄ちゃんよりお母さんの方が頼みやすいし」

「そーかい」

適当に話しながら、おでんにはしをのばす。

カチッ

別のはしが重なる。

「これは僕のだ」

壮介が睨みつけてくる。

「おぉ～我が弟よ貧しい私にそのちくわをくれないか？」

――〉〈――

なにが『我が弟』だ。

絶対渡さねえ

「あっ」

「？」

ん？

「もういかなきゃ」

やったちくわいただき！

サッ

「あれ？」

ちくわが

無い・・・・

「うんごちそうさま」

まてちくわかえせよ。
――〉〈――
「行ってきまーす」
「「行ってらっしゃーい」」
歩と母さんがハモる。
うん流石は親子だ。
なんか壮介が騒いでいるが、関係なし急いでマメユキの所にいかなきゃまずいな。
午後　７時３０分
公園
「まだ来てないのか」
数分が過ぎ
「ごめんまった～？」
「まちまくった」
「そこは普通『今きた所』とか『待ってないよ』ていう場面でしょ！！」
普通なのか？

「気分的に」

「ムーッ・・・」

なんでむくれた？

「まぁいいやさっさと龍人探そうぜ」

「・・・・」

そこで拗ねるかい

メンドクセェ

第3章（後書き）

アクセスが３８０超えました！

ありがとうございます！

感想・アドバイスがあれば気軽にお書きください。

第４章（前書き）

やっと戦闘です

第4章

「なあ属性なんだったっけ？」

「・・・・」

「俺は闇だけど」

「・・風・・」

「さっさは悪かっ・・ん？」

ガサガサ

バッグから

小さな黒いドラゴンがでてきた。

普段は赤いクリスタルを使って小さくなっているが実際はかなり大きかったりする。

「ん？どうしたブラッド？」

雪菜のポーチからも緑色のブラッドより少し小さいドラゴンが顔を眠そうにムックリ出してきた。

《グァーウ》

何か伝えいみたいだが・・・。

一応武器持って警戒するか

敬介はいつの間にか手に大きな鎌を持っていた。

雪菜も用意しようとした途端・・・

フッ・・

「ん？」

キン！！

「な！？」

いきなり目の前に現れたと思ったら金属がぶつかり合うような高い音がする。

「なんだよお前！」

「龍人というのかな？」

「そんなのわかってるよ」

雪菜が冷たい目でマント男に武器の二丁の緑色をした拳銃の銃口を向けた。

その時ふたりの、元気で生き生きした目が、おとなしく優しい目が・・・。

恐ろしく冷たいものに変わった・・・。

第４章（後書き）

４５０アクセスいただきました！

ありがとうございます

第5章（前書き）

連続でいれてみました

第5章

「もぅいいよあなたの命はないんだから」
「どうせそれは「黙れカスが！！」
「カス！？」
男がなんか叫んでいるが関係なし倒すだけだ！
「はあぁー！」
大鎌を振りかざす。
キン！
男はそれにセイバーで対抗する。

雪菜が拳銃から風の凶気を積めて力を込めて放つその弾丸は風を切り裂く刃となり男を貫く。

雪菜が戦闘をしてる間に敬介は凶気を高めていた。

だが

「いい加減我々に負けないか？昔ように」

シュッ

大鎌が男を切り裂いた。

「キサマーよくも！！」

「「ベタだな（ね）」」

「うるせぇ」

雪菜が普段絶対言わないような言葉を呟き銃を放ち封印した。

これから雪菜を怒られせるのやめよ～

「どうしたの？」

可愛いらしい顔に戻っていた。

「別になんでもない」

「そっかじゃぁ帰る？」

「そうだな」

家に戻りだした。

第5章（前書き）

７００アクセスいきました

本当にありがとうございます！

第5章

真っ暗な闇

またか・・・。

そろそろ起きようかな

ギリ・・ギリ

ん？

ギリ・・ギリ

なんの音だ？

まさか・・・

んなわけないか、いくら歩や壮介でもそれはない。

ギリ・・ギリ

「・・・・」

ヒュー・・

やば

ズドーン！

「！？」

とっさに飛んできた物をみてみると・・

矢だった。

しかもかなり凶気の籠もった矢だ。

「アユミィ〜兄弟に武器を向けるなぁ！」

ギリ・・ギリ

「ゴメンナジャイ」

もう次放つ準備してるし、しかも顔面狙ってるよ～。

こわいよ～

「ハァ～」

「すいません！」

「もういいから起きて下りてきてね、朝ご飯のできてるから」

俺の家の家族は全員龍騎士族だ。

でも歩は龍がいないのだ。

理由はトラウマがあるのと歩の龍は強いが極度な恥ずかしがり屋なので今は裏山にひっそりクリスタルを持って暮らしている。

時々帰ってくるがな。

そういや歩っていつから小さいSに目覚めたんだろう。

「なぁ歩？」

「なぁに」

「質問していいか？」

「だからなに！」

「お前いつからＳになった？」

「……」

「……」

暫しの沈黙

「……」

「…」

ギラ！

「頭撃ち抜かれたいか？」

「ゴメンナジャイ」

睨む蛇と怯えるカエル

バタン！

「いっちまった」

午前7時３０分

リビング

「お、おはよー」

「「「おはよー」」」

「おはよう敬介」

「父さんおはよう」

テーブルにつくといい匂いがする。

歩はというとなにもなかったような顔をしてる。

「そうだ父さん後で壁に穴があいたから直しといてくれない？」

「なんで穴があくんだ？」

「それはあゆみが・・」

「あゆみが？」

く、クチパクで撃ち抜くってあゆみがァー

「じゃなくて1人で空手の練習していてかべをけっ蹴ったらあいちまったんだ」

そのあと散々怒られた。

あのご飯食わせて・・・。

第5章（後書き）

ご感想・御意見お待ちしております。

第7章（前書き）

９００アクセスいきました

本当にありがとうございます！

急展開します

第7章

午前　8時

学校にいく道で雪菜と昨日の事を話していた。

「なぁ昨日のことなんだけどさぁ」

「昨日がどぉしたの？」

「マント男がさぁ『いい加減負けないか？昔ように』とか言ってただろ」

「それが？」

「それがじゃなくて『昔』っていう言葉が気にならねぇか？」

「少しね」

「あっそ、ん？」

「おぉ敬介じゃないかぁ！」

は？

「お前誰だ？」

「なにを言っているのだい？僕だよ君の大親友の村上　悠輝（むらかみゆうき）」

「あっ思い出した」

「知ってるのか雪菜？」

「幼なじみで集まった時にいたよ」

あ～そういやいたねぇいたいた。

「思い出した」

「ナルシストなゆぅくんだよ！」

「思い出してくれたんだねユキちゃん」

「うん！ひさしぶり！」

「んで悠輝はなんか用か？」

「いやただこの僕と学校に行かないかと誘いに来たのだよ」

「いんじゃないゆぅくんとも話したいし」

ナルシストが仲間になった。

パーティーのレベルが下がった。

午前　８時３２分

学校

「バイバーイゆぅくん」

「帰りいっしょにいこう」

メンドイ

「サイナラ」

「おもしろかったねぇ〜」

「まぁな」

「だが俺は思う何故夏休みなのに学校があるのだ」

「サボってたからじゃないの？」

「じゃあ何故お前がここにいる」

「そういう設定に作者がしたから」

「そうじゃなくて」

「おもしろそうだったから☆」

「かえれ」

「なんで？」

「どうせ暇だろ」

「ひまだからきたんだよ」

「学校に何しに来たんだ」

「勉強を教えに」

「誰に」

「敬介に」

……

「はい？」

「だから敬介に」

「いやなんで？」

「教えてほしい？」

「どっちでもいいが、できれば聞きだい」

「・・・・じゃあ教えてあげるよ」

その間はなんだよ！

「教えてくださいお願いいたします」

「敬介にだけ言うからね？」

「はい」

はやくしろよ！

「ヒマだから☆」

「は？」

「おどろいた？」

はい？なんか雪菜爆笑してるしなにがだよ。

「ふざけてんじゃねぇよ」

「なに！そんな言い方しなくたっていいでしょ！」

「うるせぇマメ！」

カチャ

はい？

雪菜が涙目で俺に銃口を向けてる。

銃口？

銃口を向けてる
「ちょっとまて！？」

「バカァ！」

「ナルシストなゆぅくんだよ！」
「思い出してくれたんだねユキちゃん」
「うん！ひさしぶり！」
「んで悠輝はなんか用か？」
「いやただこの僕と学校に行かないかと誘いに来たのだよ」
「いんじゃないゆぅくんとも話したいし」
ナルシストが仲間になった。
パーティーのレベルが下がった。
午前　８時３２分
学校
「バイバーイゆぅくん」

「帰りいっしょにいこう」
メンドイ
「サイナラ」
「おもしろかったねぇ～」
「まぁな」
「だが俺は思う何故夏休みなのに学校があるのだ」
「サボってたからじゃないの？」
「じゃあ何故お前がここにいる」
「そういう設定に作者がしたから」
「そうじゃなくて」
「おもしろそうだったから☆」
「かえれ」
「なんで？」

「どうせ暇だろ」

「ひまだからきたんだよ」

「学校に何しに来たんだ」

「勉強を教えに」

「誰に」

「敬介に」

……

「はい？」

「だから敬介に」

「いやなんで？」

「教えてほしい？」

「どっちでもいいが、できれば聞きだい」

「・・・・じゃあ教えてあげるよ」

その間はなんだよ！

「教えてくださいお願いいたします」

「敬介にだけ言うからね？」

「はい」

はやくしろよ！

「ヒマだから☆」

「は？」

「おどろいた？」

はい？なんか雪菜爆笑してるしなにがだよ。

「ふざけてんじゃねぇよ」

「なに！そんな言い方しなくたっていいでしょ！」

「うるせぇマメ！」

カチャ

はい？

雪菜が涙目で俺に銃口を向けてる。

銃口？

銃口を向けてるまさか！？

武器を向けられるの

２回だってのしかも今回はマジでヤバい

「ちょっとまて！？」

「バカァ！」

バァン！！

第7章（後書き）

ご感想・御意見お待ちしております。

第8章（前書き）

１０００アクセスいきました。

本当にありがとうございます！

これからもみていただけると幸いです。

第8章

俺の記憶は撃たれた瞬間に途絶えた。

白い空

ここ天国か？

俺が行ける所じゃないか。

じゃあなんだ地獄か・・

「俺・・・死ん・・だ・・の・・・・か」

そうか雪菜、今度あったら絶対に許さねぇぞ

それとな少しみえるから言っとくなくんじゃねぇ進め雪菜前をみろ！

本当は俺なお前のこと――

「死ぬなーー！」

なんか足が落ちて

「キタァー！」

ズドーン

「お前泣いてんじゃねぇのか？」

「泣いてた？うん確かに泣いてよ」

なんか笑い堪えてる。

あれ？

「お前まさか」

「なに？」

「笑い堪えて泣いてたのか？」

「うん！」

「なんで笑ってた」

「こわい顔で言わないでよ」

「いいから」

「まさかバクチクで気絶するとは思わなかったから」

はい？

今なんつったこの子

バクチク？

「はい？」

「心に傷つけた敬介が悪いよ」

「あの答え方はねぇだろ」

「でも…ひどいよ」

雪菜が少し泣き顔になっているのはわかる。

だが

「バクチク向けたお前も反省してくれよ？」

「う゛ぅ〜」

「俺もごめんな」

「ごめん…」

適当に雪菜の頭を撫でてやる。

「でもここどこ」

「ここはね」

バタン！

勢いよく扉が開き女性が入ってくる。

「うるさいです。
ここは病院ですよ！」

「すいません」

「ごめんなさい…」

でもね俺は思う。

「あなたの方がさらにうるさいですよ？」

第8章（後書き）

ご感想お待ちしております。

第9章（前書き）

歩の視点です

第9章

白い建物

病院に俺はいた。

「まったく最近の若者はマナーを知らない！」

怒られてた。

「「すいません」」

「だから静かにしつください」

なんか

『こいつうぜー』

本気で思った。

「ところでいつ帰れますか？」

「今日には帰れますよ」

若い男の医者がいつの間にかとなりにいた。

「私達は仕事がありますのでいきますよ山谷さん」

医者と山谷という女性は部屋から出て行き、取り残された俺たち。

バン！！

「お兄ちゃん！」

「ん？」

――〉〈――

私はなぜか壮介からお兄ちゃんが救急車に運ばれてたという電話があった。

「そういうことだから」

「わかったサッカーの練習がんばってね」

「オッケー」

急いで病院に向かった。

ナースステーションどこだろ。

「あった！」

「すみませんB—3はどこにありますか？」

「B棟でしたらあちらにありますよ」

「ありがとうございます」

全力で部屋まで走った。

「こら病院では走らない」

それを無視して部屋に向かった。

「まったく最近の若者はマナーを知らない！」

あった

B—3

急いでドアを開く。

「お兄ちゃん！」

「ん？」

「え？」

そこにはお兄ちゃんがいた。

だが

傷ひとつなくなく元気そうだ。

「おいおい静かに開けないか」

「…帰る」

「わかった冗談だから」

「でなんで救急車に運ばれたの？」

「バクチクで気絶した」

「はー…」

呆れたこんなバカ兄貴やだ。

「こっちは本気で心配したのに」

「部活から帰ってすぐなのにごめんな」

「ほんとだよ心配して損した」

ガラ・・・

扉が開いた。

「あれ歩ちゃんいらっしゃい」

「先輩こんにちは」

――〉〈――

「雪菜飲み物買ってきてもらって悪かったな」

「別にいいよ」

「なんで先輩がここに」

「病院連れてかれる原因の張本人なんだよ」

「原因をつくったのは敬介だけどね」

「だからって人にバクチク向けるか？」

「謝ったでしょ」

「どういう事ですか？」

私は先輩から病院に運ばれる前のこと話してもらった。

「それはお兄ちゃんが悪いね」

「そうか？」

「「うん」」

「ゴメンナサイ」

「「許す」」

「そろそろ帰って大丈夫ですよ」

後ろから若い男の人の声が聞こえた。

「帰るか」

第9章（後書き）

ご感想お待ちしております。

第１０章（前書き）

熱だしてしばらく寝込んでました。

２０００アクセスいきました。

第１０章

若い医者がもう退院して大丈夫らしいので俺たちは帰る準備をはじめた。

「ま、まってください！」

「どうしたんですか？」

歩が不思議そうに首をかしげる。

「大丈夫だからといっても今日退院ではありませんよ？」

「「えぇ〜」」

「え〜じゃあまりません」

「でも兄弟って綺麗にハモるねぇ〜」

「先輩」

「なにかな怖い顔して…」

なんだ歩真面目な顔するなんて珍しいな。

「こんなのと一緒にしないでください」

「そうだねぇ～あゆみちゃんと敬介はちがうからねぇ」

こんなのって…

おいマメよそれはどういう意味だ？

ばふっ！

「病人になにすんだ」

「うるさいマメじゃない！」

「殴られるのが当たり前だよお兄ちゃん」

……

こころ読まれた？

「敬介の考えてことなんてすぐわかるよ」

サイキック少女降臨

「私はサイキック少女じゃない」

「幼なじみあまくみないほうがいいよ」

「はぁ、もうわかったよ今日の内には帰れるから歩は母さんに伝えて」

「わかった」

午後４時３５分

「今日の夜はわたしと歩ちゃんでいくね」

「そうですね、今日は私と先輩でいきましょう」

「あっ大事なことわすれてた」

「どうした雪菜」

「ゆぅくんわすれてた」

「あぁ～、そういえば一緒にかえるとか言ってたなぁ」

別にいいだろ。

「どうする？」

「悠輝が一緒じゃ歩が話しにくいから別にいいだろ」

「それもそうかな」

「先輩～帰りましょうよ～！」

「そうだねまたあしたね敬介」

「おう！」

なんか歩の雪菜への態度が崩れてたような。

――〉〈――

先輩と一緒にコンビ組むのはじめだなぁ～

「ねぇ先輩」

「なに？」

なんか先輩って感じがしない。

「ふだんお兄ちゃんとはどんな戦い方をしているのですか？」

「どんなって、敬介がアタッカーになってわたしが援護する感じかな」

「そうなんですか」

意外と突っ込むコンビなんだぁ。

「先輩がいるから作戦を考えているのかと思ってました」

「わたしはそんな器用な人間じゃないよ」

「とか言ってる間に私の家についちゃいましたね」

「じゃあ今日の夜ね！」

「はい♪」

午後５時２３分公園

――〉〈――

「僕は歩ちゃんと敬介の帰りをまつんだ！」

そう僕の誇りに掛けて

第１０章（後書き）

悠輝は空気でしたねぇ～

ご感想お待ちしております。

第１１章

５時５０分

「はぁー疲れた」

私は家に帰ってすぐソファーに寝込んだ。

「ねるなら着替えてからにしなさ～い」

お母さんかな。

「はぁ～い」

もう声だす気力さえないよ……。

そうだ先輩に時間を聞いてなかった。

件名　今夜の事で

今日は何時にいけばいいですか？

『送信』

これでオッケー。

「ただいまー」

あっ、お兄ちゃんが帰ってきた。

携帯を持って部屋を出た。

「おかえりー」

「ん、ただいま」

このお兄ちゃんが龍人と戦ってるなんてなぁ。

「今日は夜よろしくな」

「えっ！？あっ、うんまかせて」

「あゆ『ピロリピロリ』

お兄ちゃんがなんか言いかけたが私の携帯の着信音が遮った。

件名　今夜の事で

わたしは7時３０分ぐらいで大丈夫だと思うよ～

公園しゅうごう！

待ち合わせは公園ね頑張らないと！

「雪菜か？」

「そうだよ」

「そうか、がんばれよ」

「うん！」

「でもお兄ちゃんは休んどいてね」

「はいよ」

「ご飯よ～」

あっご飯だ。

「ちょうどいい所に」

「はやくたべよ！」

急いでリビングに走っていった。

リビングに行くとソファーに誰かが倒れていた。

「壮介どうしたの？」

「全速力で病院に走ったらもう兄ちゃんいなかった…」

「「ご愁傷様」」

「今日は誰が龍人を探すんだぁ」

「私だよ」

「あれぇ、兄ちゃん行かないなんて明日は台風かな？」

「いや、嵐かもね」

「お前らなぁ」

ふたりしてお兄ちゃんに言いたいほうだい。

「ったく」

「とにかくご飯たべよ？」

「オッケー」

「あぃよ」

「んで、なんで兄ちゃんは行かないわけ？」

「私が家にいてねって言ったの」

「なんで？」

「病院に搬送されたんだから」

「俺は人間だ」

第１１章（後書き）

３０００アクセス突破しました。
ありがとうございます。

第１２章（前書き）

４０００アクセスいきました。

ありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第12章

バタン！

俺は晩飯を食い終わってすぐに自分の部屋のベッドにダイブした。

「はぁ、今日は色々とありすぎてつかれたなぁ」

マジねみぃ。

「なぁ、ブラッド」

《グアゥ？》

横で丸まってる小さいドラゴンに話しかけた。

「ったく、雪菜も色々と大変なことをしてくれちゃってよぉ」

コン！コン！

「誰？」

「お兄ちゃんちょっといい？」

「あぁ開いてるよ」

もとから鍵なんてついてないけど。

「んでどうした？」

《グァァ…ｚｚ》

寝ちまったよ。
つか空気読め。

「ははブラッド寝ちゃったね」

「で、どうしたんだ？」

「うんお兄ちゃんって好きな人いる？」

「ボフゥッ！？」と、唐突すぎるだろ！？

「な、なんだよいきなり」

「いやいるのかなって思っただけ」

「歩はどうなんだ？」

「いるよでも…」

「ん？」

「でもなんだ？」

「でも…」

「いつ言えばいいのかわからなくて」

「…」

「んなの自分できめろ」

「そうだね」

「そろそろ時間だろ？」

「うん」

「がんばれよ！」

「わかった！」

歩は慌てて部屋を出て行った。

好きな人ねぇ。

――〉〈――

それよりはやく公園にいかなきゃ。

「すみません遅れてしまって」

「大丈夫だよ」

「そうですか」

「でも人を待つのは久しぶりかな」

「？」

どういうことだろう？

「いつもわたしが遅れて敬介が先にくるんだよ」

へぇそうだったんだ。

「じゃあいこうか？」

《ガァー》

「うわぁっ！？」

「ど、どうしたの？」

「ど、ドラゴン…」

――〉〈――

私が小さい時にドラゴン、『グラント』と契約をした。

グラントは私の水属とはちがう地属だった。

『歩おめでとう！』

『ありがとうお母さんお父さん』

『おめでとう…』

『お兄ちゃんもありがとう』

『契約してくれる龍がそいつしかいなかったんだよ』

『それ照れ隠しか？』

『あぁ？』

『いでででぇ！』

『壮介お前はだまってろ』

『フフフっ』

『『ん？』』

『いやお兄ちゃん達がおもしろいなって思ったの』

『そっかじゃぁ明日からさっそく練習な』

『ドラゴンとのコミュニケーションを考えないといけないんだ』

『そうなんだ』

『じゃあ明日のためにさっさと寝るか？』

『うん！』

疲れた～

私はすぐにベッドに飛び込んだ。

『ねぇグラントはどういう性格なの？』

《……》

『ねぇ』

《……》

『ねぇってば！』

《ググルルゥゥゥ》

『ひぐっ！？』

《グルゥ…ＺＺ》

寝ちゃった…

『怖かったぁ』

『どうした歩？』

『いや声かけても返事してくれなかったから』

『だからって怒鳴るなって』

『ごめんなさい』

『契約してすぐなんだからそのドラゴンもお前も不安定なんだから』

『わかった』

『じゃあおやすみ』

『おやすみなさい』

第１２章（後書き）

これから少し歩編が続きます。

第13章

「歩ちゃん！」

「はっ、ハイ！！」

「どうしたの？『ケツアルカトル』をみて驚いてからボーっとしちゃって」

「それはちょっと昔のことを思い――」

《ガルルゥゥ！》

歩が何かを言いかけた時ケツアルカトルのうなり声によって遮られた。

――なにかがもうすでに戦闘を始めている

「どうしたんですか先輩？」

「誰かがもうすでに戦闘を始めているみたい…」

えっ？誰かって

「私達以外にも龍騎士族が存在するんですか？」

「わたしにもわからない……ケツアルカトルどうなの？」

――この世界にはまだ生き残った龍騎士族の子孫がおまえ達のように存在する。
いてもおかしくはない

「なんていってますか？」

「この世界に生き残った者が子孫を授かっていたらおかしくないって」

「私達も生き残り子孫なんですよね」

そういえばほとんどのドラゴン達も生き残りなんだよね。でもケツアルカトルだけは別であれから４０年近くは過ぎてるのにまだ生きている。

ドラゴンは種類によって寿命は全然違うらしい。

「それより急いでいこう！」

「ハイ！！」

「どこ？」

――太陽が沈む山

「よし東ね！」

「先輩？それはっうわぁっ！？」

先輩はケツアルカトルの力を解放し元々の大きさに戻して、ドラゴンは私と先輩を乗せて飛びたった。

「せ、先輩」

「どうしたの？」

「私がドラゴンにトラウマがあるの知ってますよね？」

「……」

「先輩？」

「忘れてたよ♪」

「……」

開き直った…

第13章（後書き）

ケツアルカトルってなんかに出てきたような…

第１４章

「いいこと教えてあげましょうか？」

「なぁに？」

「ケツアルカトルは分かるよねぇ？」

――大体はな

「はやくわたしにも教えてよぉ」

――我々が向かっている山は真逆だ

「先輩はなにか考えがあるのかと思って言わなかっんですが」

「じゃあはやくその山に向かって！」

――世話が焼ける

「うるさーい！！」

――少しは静かに…っ！？

――〉〈――

《グゥゥ…》

「どうしたブラッド」

ブラッドは外に向かってうなっていた。

――仲間が戦っていたのだが

「だがなんだ？」

――どうやら何者かに洗脳されていたようだ

――〉〈――

「何者か？」

「龍人じゃないの？」

――違うそんな能力はないはずだ

「とにかく現場に行ってみよ」

……

――着いたぞ

「なんにもないよ」

でも木や岩が少し前にあった争いの凄さを物語っている。

「争いがあったのは確かですね」

《……》

「どうしたのケツアルカトル？」

――まだ謎がある

「謎？」

「どうしたんですか？」

「いやケツアルカトルがまだ謎があるって」

――ここまでの争いがあって何故いないのか

「単に場所を変えただけでしょ」

――もっとも気になるのはこの場所から3つの気配が同時に消え去ったことだ
「き、消え去ったってどういうこと！？」

――それがわかってたらここにはいない

「あれこれって…」

「どうしたの歩ちゃん？」

このブレスレットは間違いないなく私があいつに渡したものだ。

「ほ…本当に……消え…た……の…？」

――あぁ確かに

「どうしたの歩ちゃん？ふるえてるよ？」

「あいつ……だ」

「なに？」

あいつが…

「ここに…」

そうあいつが

「あいつが『龍魔導師』とここにいた！」

「龍魔導師？」

――昔に封印されていたはずだが

「あいつ…が…うっ……うっ…うわぁぁぁぁぁっ！！」

「あっ歩ちゃん！？落ち着いて！！」

――どのような過去があったのだろうか……

――〉〈――

破滅の都　レヴァース

「よかったのか？」

「なにがだい？」

「ほかの奴が来ていたのにこのような所に次元移動をさせてどういうつもりだ」

「僕達は異なる存在だからね敬介を巻きこむわけにもいかない」

「あくまで仲間優先か」

「それに僕はドラゴンに憎まれる存在それが龍魔導師」

「そうかい」

「さぁいくよグラント」

第１４章（後書き）

ご感想お待ちしております。

第15章

カチャッ

「ん？」

父さんか？

バタン！

二階にあがってくるとしたら歩だな。

「まぁいいやさっさとねよ。」

――睡眠はしっかりとっとけ

「あぃよ」

あしたの朝にでも今日のこと聞いてみるか。

午前7時17分

ジリジリ

「……」

ジリジリ

「……」

ジリジリ

怒

「だぁうるせぇ機械の分際でぇ！」

蹴っ飛ばした時計は見事にゴミ箱に入った。

――ホームラン

「うるせぇ」

本当に…

「なんか変な感じ…」

あぁそうか

いつもなら起こしにくるんだ。

午前7時33分

「おはよぉ」

「「おはよお」」

ん？

「父さんは？」

「朝早かったのよ」

「あっそうだ、歩」

「あっおはよぉお兄ちゃん、でぇなに？」

「昨日どうだった？」

「逃がしちゃったみたいゴメン」

手を合わせて言う歩

「別にいいよ」

「ありがとー！」

「でも今度は気をつけろな」

マジでたのむ。

「わかった」

ブーブー

「お兄ちゃんの携帯じゃない？」

「だな」

「もしもし」

『あっ敬介？』

「どうした雪菜」

『いやさっきゆうくんからメールがあってねせっかく夏休みなんだから旅行行かないかだって』

「いいんじゃねぇか？」

『敬介いける？』

「別に大丈夫」

『じゃぁ歩ちゃんとかもよんどいて！』

「あいよ」

「お兄ちゃん誰から？」

「雪菜が旅行いくかって」

「私も行く！」

「んじゃ母さんに話してみるか」

「てな感じなんだけどいいかな？」

「行ってらっしゃいいい機会じゃないの」

「ありがと」

「他にだれか呼ぶか？」

「壮介は？」

「僕も行く！」

「結局は兄弟か」

「んじゃ悠輝に電話」

『は～い旅行のことか～い？』

なんか切りてぇ

「あぁ」

『誰かよんだ？』

「兄弟」

『わかったよ～ユキちゃんも誰か連れてくるみたいだから』

「だれ？」

『わからないけどでも、一週間後の朝の９時ぐらいに僕の家に集合』

「わかった」

「大丈夫だった」

「一週間後だってよ」

「「わかった」」

ピンポーン

「敬介でてちょうだい」

「へーい」

ガチャ

「敬介〜」

ん？

「あれぇ誰もいないなぁ」

「こっち」

「あぁわりぃなあまりに小さ！くてわからなかった」

バキッ！

「ぐはぁ」

「ゴメン！つい反射的に！」

「だからと言って毎回殴るなって」

いてぇ……

第１５章（後書き）

次話から旅行編

第１６章（前書き）

毎日みていただきありがとうございます。
これからも続けてみていただければ幸いです。

第16章

午前8時5分

「「起きろぉぉ！！」」

「……！？」

いつもとは違う1日のはじまり壮介と歩がベッドの布団をひっくり返しなにかが転がり落ちた。

「……グゥ…」

「なぁ歩っていつもこんな感じなのか？」

「いいかげん起きろぉ！！」

「ちょいとトイレ」

午前8時21分

「僕がトイレ行ってるあいだになにがあったわけ？」

頬に真っ赤な紅葉が浮かび上がっている敬介とがつがつ朝食を食べる歩に疑問を向けた。

「はやく食べないと遅れるよ！」

「「へーい」」

「準備完了っとあゆみぃそぅすけできたかぁ？」

「大丈夫」

「できたよぉ」

悠輝の家に向うため家の玄関を開けた。

「じゃあいってくる」

「「行ってきまぁす」」

「行ってらっしゃいお土産買ってきてちょうだいねぇ」

「あぃよ」

「悠輝さんのお家ってどんな所？」

「ほぼ豪邸」

「スゴーイ！」

「マジで？」

本気ででかい
たぶん今日はバス貸し切りなんだろぅな。
あいつの家は金持ちだし

「「デカいっ……」」
「あぁデカいよ」
庭や家ついでに門もだ。

「とりあえずインターホンあるかな」
「あるよ音が問題だけどな」
壮介はインターホンを鳴らした途端クラッシックが流れ始めた。
「ハーイ開いてるよぉ」

――〉〈――
「あっ敬介！」
「よぉ雪菜」

「どうしたの顔真っ赤だよ」

――あの平手打ちはいたいな

「朝に起きなくて歩ちゃんにやられたんでしょ？」

「さあな」

「んでそこのふたりは見覚えある顔だけど？」

「よろしくぅ～」

「よっ！」

壮介と同い年の鐘虎（かねこ）　幹弥（みきや）と俺と同じクラスの星野（ほしの）　聖夜（せいや）がどっちも幼なじみみたいなもんだ。

「んでなんでおめぇらがいるんだ？」

「白井先輩からメールがきたので」

「そうゆぅこった」

「よぉ幹也」

「どもです！」

まさかこのふたりを連れてくるとは思ってなかった。

「敬介ぇはやくバスに乗ろう？」

「イックゼェー旅行へｓｔａｒｔ！！」

「はぁ疲れそう」

もちろんバスの中ではしゃいでるのは星野で呆れてため息をついてるのは幹也だ。

バスは目的地に向かっているがその後あんな事になるなんて、考えつくことなんてあるわけなかった……。

第17章（前書き）

毎日読んでいただきありがとうございます。

第17章

「さぁみなさんこちらが海です」

なんでバスガイドいるんだ？

「うぉぉーー！！海だぁ！」

「星野先輩あぶないですょ…ねむぃ」

「相変わらずマイペースなんだね～幹也は」

「歩も小学生の時と性格変わってないじゃん」

「急に変わったらこわいよ」

「そうだね」

そりゃそうだ。

「なぁ幹也」

「なに壮介」

「そこのふたりなに？」

それ気になってた。

一人は黒髪のロングヘアーもう一人ヘアピンの付いたポニーテールの女の子だ。

「あぁこのロングの方は柊（ひいらぎ）花音（かのん）でヘアピンの方は柊（ひいらぎ）琴音（ことね）っていうんだ」

「花音といいます」

「……」

「どうした琴音？」

「…なんでもないとりあえず…よろしく」

「相変わらず静かだねぇ琴音は、花音ははもうすこしやわらかくしていいと思うよ」

「私はやわらかくしているつもりなのですが」

「あのさー幹也このふたりって」

「まぁいいやこのふたりは双子ですので」

「「よろしくお願いします」」

やっぱりな。

「君ら何年生？俺は高校1年生の星野聖夜っていうんだよろしくな」

「いきなりナンパかお前は」

「えっとぉ歩ちゃんと同じです」
「では今日の夜にでも一緒に――」
ズバーン！！
「なにいってんのぉバカ！」
ありえない音とともに雪菜の声がこだまする。
「痛そうだね今のビンタ」
「歩並みだな」
「は？」
目的地につく頃には男ふたりが再起不能の状態でバスの中で倒れていたとか。

午後1時17分
「ねぇ敬介」
「なに？」
今部屋でくつろいでいます。

「海にみんな行っちゃったね」

「そうだな雪菜は行かないのか？」

「ケツアルカトルとブラッドいるから海にはいけないよ」

「俺がみてるからいってこいよ」

「敬介いないとおもしろくないからいいよ」

「あっそ」

ガラッ

誰か帰ってきた？

「…あの」

「どうしたのぉ花音ちゃん」

「白井先輩は海には行かないのですか？」

「いけないんだごめんねぇ、ありがとう」

「これ以上は邪魔のようですので失礼いたします」

「花音ちゃん何を考えてるのかな？」

やべーマジでこえぇよ、雪菜の顔なんかヤバいよ笑ってるけど心笑ってねぇよ…。

「いえいえお気になさらずに」

「行っちゃったな」

「そうだね」

「ブラッドのこと聞かれてねぇよな」

「わたしにきかないで」

――しばらく話しかけない方がいいかもな

「そうだな」

「なんか言った？」

睨むなって。

「なんにも言ってねぇよ」

第１８章（前書き）

テスト期間なので更新しづらいのですが毎度みていただきありがとうございます！！

第18章

「あついよぉ星野先輩～悠輝先輩～」

「なにを言っているんだい幹也君？」

「だから海にきているんだろうが！！」

果てしなく続く青い海、あつい太陽はまさに夏だ。イルカや鴎が大型クルーザーの横を通り過ぎる。

「何故悠輝さんが舵取っていらっしゃるのですか？」

「ちょっと色々とあってね、今度一緒に話してみるかい？」

「はい！」

とても嬉しそうな顔をしている花音の顔をみていた壮介はばつの悪そうな顔をしていた。

「村上先輩、僕ちょっと部屋に行ってますね」

「わかった」

「どうしたのでしょうか幹也くん」

「いや僕に方に振らないで」

「いぃなぁ！村上！花音ちゃんは取られちゃったから俺は、琴音ちゃーん海についたら一緒にサーフィンに行こう！！」

「振る人が幹也さんしかいなかったので」

確かに周りには舵を取っていて話し掛けられない悠輝に暴走する聖夜を無視して話してる琴音と歩しかいない。

「壮介はどっか行っちゃったしね」

そんなことを話していると船内に舵取りの声が聞こえた。

「みなさんつきましたよ亀神島」

「亀神島はとても自然が豊なんですよ？」

「自然と言えばアウトドアァ――！！」

「「「「なんか意味ちがうような…」」」」

「とりあえずおりましょう」

「壮介ー私たち先におりてるからぁ」

「ちょっとまてって！？」

島に7人おりた。

「雪菜先輩とお兄ちゃんも来れば良かったのに」

――〉〈――

「なぁ雪菜あいつらどこに行くんだ？」

「亀神島だよぉ」

なんかなぁ。

「どうしたの？」

「ちょっと出掛けくる」

ちょっと気になることがある。

「えぇ～ひとりぼっち？」

「ついてくか？」

「うん！」

「気になることってなに？」

「亀神島について」

「なんで？」

なんつぅかだな。

「なんとなく引っかかってしょうがねぇんだよ」

「わかった！とりあえず旅館の人に聞いてみよ？」

「あぁそうだな」

受付の所に行くと人が集まっていた。

「なんだ？」

「わかんないから行ってみよー」

「あのなぁお前はっ――」

手引っ張るなぁ！

――ケツアルカトルも苦労してるんだな

――まぁな、ブラッドのマスターはどんな感じだ？

――最悪な奴だ

「「おい」」

ふたりのパートナーの声によりドラゴンのプチ会議終了。

「亀神島が動いたって本当なんですか！？」

「えっ！？」

いきなりマイクを持ったリポーターらしき人に雪菜は話し掛けられた。

「あのぉ…なんですか？リポーターさん？」

「このようなものです」

名刺をわたされた。

「河嶋（かわしま）　健太（けんた）と申します」

「本当にリポーターだったんだ」

「ところで何の用ですか？」

「亀神島についてなにか知ってますか？」

「いや俺たちの方が知りたい」

「我々もあまりわからないもので」
「「そうですかぁ」」
なんか面倒くさそうだな。
「あっでもその島には亀神様がいると聞きしたよ」
だいたい神様なんかいるのか？
「とりあえず行ってみようよ」
「どうやって」
「取材で行きますので送っていきましょうか？」
「ありがとうございます！――ガハッ！」
「本当に敬介って遠慮しらないよねッ？」
手がぁ！
「別に遠慮しなくていいですよ」
「あ…あの…ガッ！？」
「そうですかありがとうございます」

「マメ…本当に…痛いからや…めて」

さらに力が加わる。

「ギャ〜〜！！」

「…五月蝿い」

「では準備しますので入り口で待っていてください」

「はい♪わかりました！」

心が笑ってなーい！！

誰か助けてぇ！河嶋さんいかないでぇ！

「ヘルプミィーー！」

「……黙れ」

雪菜はオニィィー！

第18章（後書き）

ケ　――終わったなあいつ

ブ　――まぁそういうことだケツアルカトル時々プチ会議をやるぞ

ケ　――勝手に決めるな

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1532i/

漆黒の死神

2011年10月9日23時51分発行